

749 判検事並弁護士試験登第者謝恩会

〔「法学新報」第33卷4(376)号 大正12年4月1日〕

○判検事並弁護士試験登第者謝恩会 中央大学出身にして大正十一年度第二次判検事並弁護士試験に合格したる者実に二百四十余名の多数を算し而も弁護士試験の首席者を得加ふるに在る学生中十数名の合格者を出したるか如きは又特筆に値ひするものと云ふべし、此光榮を致せるもの一に質実剛健なる校風の下詢々乎として倦むを知らざる恩師諸先生の多年の御薫陶の賜物に外ならずされば此の高恩に対する微衷を表せんと吾人等相謀り去る三月三日の夜東京ステーションホテルに謝恩の宴を開けり来り会するもの六十七名開宴前一同諸先生と共に記念の撮影

を為し六時半食堂を開く、一同の眸は明るき電灯の光に反映して弥が上にも輝く、歓喜に酔ふて上気せる顔の美しさ皿に触るナイフの音も歓びの音楽の如く響く、斯くてデザートコースに入るや坂芳市君拍手裡に立つて謝恩の辞を陳べ今や法学界は漸く多事、曰く新刑事訴訟法、破産法の実施曰く陪審制度問題と吾人の手腕を試むべきもの多し吾人一層切磋琢磨學術に人格に向上を計り以て師恩の厚きに報ひんと次いで花井、片山、鬼澤諸先生は何れも吾人等の将来に対し懇々として訓へらる其の情慈母の夫れの如く感激に充てり次いで西川、前田、草野、服部、諸先生も又懇篤なる祝意を表せられたり、中山生此の御高話に対し謝意を表し諸先生の御期待に副ふべく努力すべきを陳べ終つて花井先生の発声に依り高く杯を上げて中央大学の万歳を三唱せり祝福せられたる春の夜は更けて鴨緑紅節追分などの隠芸に一段の興を添へぬ、次で鄭恒基、李鏡臺、頼雨若君等の奮闘談又は感想談などありかくて宴を撤し別室にて休憩の上各自握手を交換して散会したるは時將に十時なりき因に当日の出席者は来賓、花井卓藏、林頼三郎、片山義勝、西川一男、鬼澤藏之助、草野豹一郎、前田直之助、服部平六の諸先生並教務主任大松直重氏及登第者左の諸君なり(中山一縷生記)

加藤 英恭	野本 豊	福家 眞澄	森 信一
山下常次郎	川原 義意	阿部與三郎	浅井 留吉
荒川 武徳	池田 勇	岩澤 惣一	入江 勝一
上運天賢徳	遠藤 一	太田 富	小川 清久
大川 貞三	菊池 意藏	黒田 實	近藤 亮太

香田 廣一	小崎喜代藏	小林高一郎	佐々木 賢
坂 芳市	佐々木喜七	下村 宗二	島村 銳郎
白瀬 次郎	菅原 勇	關口 正吉	千田 和三
田中 信男	田邊 文雄	武山 等	伊達 利則
高田 富興	田中 泰仁	森山 喜六	高山原次郎
千葉 秋雄	鄭 恒基	時田 至	徳田 秀雄
中新井五郎	檜崎 渡	長尾文治郎	二反田眞一
長谷川貞市郎	春田 定雄	原 重	林 房太
松永 初平	松浦 政信	皆川 泉	森山 喜六
山川 深藏	山下東太郎	山中 大吉	山田 廣治
頼 雨若	李 鐘臺	加藤 儉藏	